Bull. Mukogawa Women's Univ. Humanities and Social Sci., **45**, 145－152(1997)
武庫川女子大紀要（人文・社会科学）

和歌誹諧体の宗匠　伊東颯々

管　宗次
（武庫川女子大学文学部国文学科）

（一）はじめに

本稿にあげる、幕末期の近江歌壇の中心人物である伊東颯々を狂歌人として分類した研究書は多いが、それは伊東颯々の学統・歌論・歌風のいずれをみても大いなる誤りであり、純然たる歌人であり、京都の鈴屋門の流れを引く、近江歌壇の重鎮である。

伊東颯々の伝をあげる前に、颯々の二十五年祭の追悼集である『まつかぜ(萬都加是)集』(架蔵本、図版①、『まつかぜ集』表紙)に寄せられた喜村(木村)行納の序文をあげよう、

伊東巨規うしは秋廼屋颯々と号て家の業は鍛冶職なり
その作衆人にすくれたる事は人みなしるところなれはいはす
歌は誹諧躰をたてられたれと今世にいふ狂歌とはたかへり
かの古今集の俳諧躰是なりかくて古学の道にあきらけく予か
師城戸千楯主の良友なれは都にのほられし時々師のもとに
とふらはれしかは予もをり〳〵あひてまなひの道をともにかた
りし事ありしをはや二十五年の霊祭のよしを聞に年月は
みつうみにうかへる舩のたゝさまにすきてまほにおとろかるゝ
にこそかゝれは其御霊にたむけんとて四季雑五種の
題を撰て好みたまへりし道をおひ御たまをなくさめ
また終りに此うしの歌ともくさ〳〵三千とせになるてふ
もゝのなかははかりを桜木にゑりて詞の花のあり
うせす世につたへ人々のめておもへらむことをはかられ
しはをしへこのかきりなきまこゝろなりけり予もその
むかしをわすれぬ心ひとつをたねとしてことの
はしめに筆とりてゆゑよしをしるし侍になん

明治十六年四月一日　喜村行納

これによって、独自の歌風、誹諧体をたてた颯々の学派、交流などが明らかになるわけであるが、滋賀県教育会編『近江人物志』(大正六年十一月十日刊、復刻版昭和六十一年十月十日刊、臨川書店)には、その伝記を簡明にまとめたものがあるのであげる。

伊東巨規

巨規は歌人なり。通称は源兵衛、秋廼舎と称し、号を颯々と云へり、家世々鍛冶を業とし七軒町に住す。天明二年十月生まる。幼より読書を好み、家業の余暇研鑽怠らず、園城寺の僧に就きて仏学を習ひ、後江戸真顔及び京都の某に就きて歌道を研究し古今集にあるが如き誹諧体の一派を立てゝ大いに斯道の発展を計れり。併も之れに耽らんことを慮り左の歌を工場の傍に掲げて銘とす。

家の業怠りなせそみやびをのふみを読むとも歌をよむとも

されば、万葉集二十巻の註釈を物せるも皆家職の余暇に成れるものにして、其の篤学実に敬すべし。当時門を叩きて教を乞ふもの多く、其の名甚だ高かりき。薩摩主亦其の家臣に命じ帰路颯々に就きて山の題の歌を所望せしむ。家臣命の侭に其の家に至る。扈従威儀を正しうして其の家に至り来意を告ぐ。家人驚いて颯々に告ぐ。時に颯々工場に在り、工衣の侭其の由を聞く。使者金地の短冊を出して染筆を請ふ。則ち其の傍に在りし筆硯を執り、直ちに記し畢りて之れを与ふ、家臣大いに悦び其の謝金を問ふ、颯々大いに怒り忽ち其の短冊を断ちたりと云ふ。就業の間に人の訪ふものあれば、工場にて工衣の侭面接するを常とせり。鉄槌の響鏘々たる間に常に吟詠をたゝず誠に非凡の人なりと云ふべし。鍛工亦巧妙にして、其の作品賞すべきもの多し。安政五年二月十六日歿す、年七十七。

山　巨規

あけぬまの朝日に照りて暮れぬまのもちの月みる山は不二の嶺

松

またしても千世のためしにひかるゝはひさしき物と松や思はん

郭公

ほとゝぎすあやめの枕そばだててみるに影なくまどに月あり

辞世

くるしみの海なし死出の山もなし道ふみまよふ心なければ（松風集）

（大津市志）

右は、伊東颯々の逸話も伝えて、興味深いものがあるが、不審ともいえるのは、学統の面で「京都の某に就きて歌道を研究」とあって、その師の人物を詳らかにしないことである。その点、国学院大学日本文化研究所編『和学者総覧』（平成二年三月二十日刊、汲古書院）にも、学統の欄は空白のままである。

しかし、先にあげた、喜村（木村とも書く）行納の序文中に「予（喜村行納のこと）か師城戸千楯主の良友」とあることや、同じく『まつかぜ集』に跋文を寄せた（後に掲げる）服部春樹の師が、香川景樹・村居真節（平田篤胤門人）に学んだとされているので、幕末期頃の地方歌壇の典型ともいえる趨勢をよくあらわしており、鈴屋門、桂園、篤胤門の両様両派に学ぶ人々が、互いに交流していることがわかり、颯々の学統の師は明らかにされないものの、鈴屋門か桂園派の人かと思われるのだが、狂歌において鹿津部真顔に学んだということであるが、それらの諸々の人々に学んだうえで、狂歌人として五・七・五・七・七の三十一文字を詠むことをよしとせず、あくまでも、颯々自らの詠むのは和歌であるとし、江戸の俳諧歌とも同じうせず、和歌の俳諧体として一派独立の詠風を古今集に学び立てた、ということが、その和歌の師（学統）を詳らかにせぬという最も大きな理由であったのではないだろうか。

この師の無きことこそ、颯々の颯々たるものがあるのであろう。本稿の次章には、『まつかぜ集』に載るところの、颯々の遺詠・遺稿（短歌・長歌・雅文・端歌・片歌）の七十三作があるので、それを翻刻してあげることとする。

（二）『まつかぜ集』

先に述べた如く、『まつかぜ集』は、伊東颯々の二十五年祭の追悼集であるが、彩色の見開き一丁の富士に小松の画（雲涛筆）をいれ、颯々の門人たちが、五題を定めて、各々颯々ゆかりの人々に追悼の歌集にせんために、和歌を乞い集めて上木したものであるが、そのいきさつは、服部春樹の跋文によって明らかであるから、次にその跋文をあげる。

松風の音たかく聞えし颯々翁は家のわさかぬちの
みちにも秀てよのかきりあさよひ怠りなく勤め
られけるいとまのひまにはみやひこと好みて折々のことのは
つみてこゝろをなむ遣られけるとそことし翁の追
福のをりにあたれりとて今のあるし秋近ぬし蕉社中
の人々と謀りてたむけ草にと五題のうたを四方の
風士達に乞ひさくら木に忝りて其人々に頒ち
給はんにつけて翁の読みおかれしこゝらくさ〳〵のなか
よりいさゝかつみ出て併せて一巻の冊子にものし
給へるよしを岩間のみつのつふ〳〵たかきにかく
なむ明治十五年九月倭文屋のあるしはとりの春樹

『まつかぜ集』には刊記がないが、序文は明治十六年四月一日とあるので、明治十六年四月一日序刊となるか。裏表紙見返しに朱刷で小さく「印判板木并税紙暦仕入所／大津朴屋町西湖堂鳥居」とある。次に書誌をあげる。

○書誌

〈書名〉「まつかぜ集」（内題「松風集」、題簽「萬都加是集　全」）

〈体裁〉袋綴、縦二十三・一㎝×横十五・六㎝

〈丁数〉全二十三丁

〈付〉袋付「秋廼屋颯々追福　松風集　社中蔵梓（秋廼屋社）〔朱印〕」

同書の内、本稿にも紙数の限りがあるので、颯々遺稿の部分のみを、次に翻刻して、そのなかから幾首かを拾って颯々の歌風である和歌の俳諧体がいかなるものであったのかを、さぐることとしたい。

○翻刻凡例

- 原本の板本では、題・詞書と短歌は一首一行書きになっているので、その形に倣うように努めた。
- 仮名は現行字体に改めた。
- 漢字の異体字・旧字体は現行字体に改めた。

・仮名遣い、送り仮名は原文のままとした。
・各々に番号を施すこととした。
○翻刻（『まつかぜ集』十六丁裏～二十二丁裏にあたる）

松風集誹諧謌

秋廼屋颯々

1 立春　谷くゝのすむ谷出て鶯のさわたるきはみ春立にけり
2　わか水をくむ井のうちにすむ蛙鶯またて春やしるらん
3 早春　若菜つむ子等かふくしにせゝられて春におとろく荻の焼はら
4 湖辺子日　子日して千代にあふみのしら髪はなむきても小松ひくらん
5 梅　うくひすにおのれさせほを枝手折る人になかしそ梅の花かさ
6　立よれはおつる雫のうつり香に手をらぬ梅のぬれ衣やきん
7 梅風　写しゑに見おとされしと咲うめの花もまひする袖の下風
8 柳　雪をれをのかれて春になひけるはよわき柳のちから也けり
9　長閑なるひなたに眠るねこ柳このめも春の時やしるらん
10 花　さしもくさもゆる伊吹の山風にちりくなみをそしかの花園
11　手をあてんやうにおもへはくさめさへ風かといとふ花のひる時
12 蛙　行くれて木の下かけになく蛙いくさの中にうたやよむらん
13 菫　誰か野にかもしゝ酒のつほすみれ打かたむけて一夜寝なまし
14 早蕨　さま〳〵に手をまけかへてさわらひの萠るかなにかけ画をそする
15 山吹　背戸かとに咲ひろこりて我庵を口なしにせし山吹の花
16 牡若　いたつらにかけなうつしそかほる花池の心のうこきもやせん
17 郭公　いなといひし去年の五月のしひかたりこの頃こふる郭公かな
18　ほとゝきす枕の山の一声をなと寝たかひて聞はしつけん
19 螢　あたし闇の露ともきえすいける身を薪となして行螢かな
20 蓮　蓮の露涼しき池のこゝろもて何かは汗のたまとあさむく
21 蚊遣火　さくかへし蚊火のけふりにむせかへり我さへ宿をやらはれに
　けり
22 初秋　荻すゝきうなつきあひて初風に手つゝ女やおとろかすらん
23 草花　ふちはかまぬきたるぬしをしらまくは女郎花にやうらとひてまし
24 薄　草籠にかくれなからもまねくかな残るすゝきも里に出よとや
25 女郎花　夕月のさはりもなきをつみふかき女郎花てふ名はおほせけん
26 虫　山吹の花折くれし垣ねよりあきをことわるみのむしの声
27　世間に耳とこそ聞はうき秋の壁にくちあるきり〳〵す哉
28 月　大ゐ川月に棹さすいかたしも聞はかつらのをとこなりけり
29 里踊　手つくりのをとりゆかたに老人もむかしをさらす玉川のさと
30 相撲　立あひをいさなふ月のはなすまひきのふのもちの取手ならまし
31 拷衣　おと聞は落るなみたの玉たすきかけかまひなきよそのきぬたも
32 霞　破かやの小穴つくらふこてのうへにあられたはしる軒のしの原
33 雪中旅　秋かせの窓にさらしし顔も今めにたつ旅の雪の白川
34 千鳥　釜の名に聞し芦やのうらちとり茶の友よひて夜たし鳴らん
35 冬の歌の中に　漬ものゝ時は来にけりあかたよりひきては遣ふ鼡大こん
36 埋火　小夜中にかきおこされて埋火に残さす炭もつふやきにけり
37 神楽　霜の夜をいたくふかしてはやうたのあかゝりふむるしかのをと
　め子
38 恋　あふことにかへんといひし我命のはさんとてや人のつれなき
39 初恋　見そめつるその俤かめの前にたゝふら〳〵のやまひとそなる
40 祈恋　いのらしよ行あふこともかたそきの契さへかくちかふへしとは
41 切恋　恋死ん今のまつこの水かゝみかけに成りても逢見てしかな
42 歳暮恋　春たゝはあたし心の花さかんとしの今はにあふよしもかな
43 山　山といふ山をふもとの麓とみておのれ山なす山そふしの嶺
44　童さへかたちはかくを画工みの筆とりかぬる山はふしのね
45 宇治川にて　岩ありて水のさかまく所をは今は茶にくむうちの里人
46 山家井　いとほとに落る清水の結ひあけて命をつなく山の下庵
47 松経年　幾世ふる松そとゝへはしる人のなきこそふるきためし也けり
48 鐘　ますかゝみかねの供養に鋳こまれてわか魂を音に聞かな
49 酒　泉川いつみきといふ名をつけて甕の原にやかもし初けん
50 鯉　河竹のなかれにあらぬよと鯉も身をつくりてそ愛られにけり
51 艸双紙　つくりえし言葉の露に世の人の袂をぬらす草双紙かな
52 夢　にきり飯のいも安からぬあた夢を結ひかためて漠にはませむ
53 懐旧　丈夫といひし昔の強弓を弱こしにはる老そくやしき
54 提灯と釣かねさるの荷ふたる大津ゑの賛
　暁のわかれとしのふ恋路にはいらさるものとすてに行らん

55 箒に手拭もて頬かふりさせたる
　案山子とも見ゆるはゝきは秋の田のいねとや人をおとろかすらん
56 涅槃像のかた　俳木にかゝるうき世のならひとは釈迦も御存しあらぬ
　けふかな
57 南無阿弥陀仏折句　何事もむかしに有るそ浅ましき見しも聞しもたゝ
　夢のこと
58 釈教　ふみまよふ心の闇に入りてこそ其暁の空もまたるれ
59 無常　かけは飛ふ声のうき世に身をよせてほこり顔にもすこすはかなさ
60 橘廣田鶴麻呂長崎より天艸にわたりて其かへるさ
　明石の沖に溺死せられけるをいたみて
　ともしひの明石に名をもかゝけしはいたましなから死ひかりなり
61 三月二日夜孫の死したるをいたみて
　かねてよりよわき生れといたはりしかひこそなけれ玉の緒柳
62　手遊ひをみるもはかなしはかた獨楽我をまわしゝ事しおもへは
63 辞世　くるしみの海なし死出の山もなし道ふみまよふ心なけれは
64 蛭子神　神々の留主事せよと氏子らにさかな商ふかみそこの神
65 七十になりけるとし
　友人のちから車に七くるま七十年まてはのりつけにけり
66 猿の心に代りてよめる長歌
　をちこちのたつきもしらに蘆つもる山のほこらを小くるまのうしは
　きをれとなくるさのとほつみおやははしきやしはしき猿とふ弓殿の
　名を四方八方に呼子鳥さる事ありて剱太刀つかへをやめし其猿の孫
　かひまこかひゝ孫に我はあたれり梓弓末のなから谷川の流をくみ
　て久かたの月を居なから手に握る聞えもあれとそれをしもしらさる
　顔に足ひきの山の木の実や草のめを摘にしつれは朝もよし気楽にす
　むを我声につたへしてさへく唐人はらも苅萱の乱れし世には現身の
　みをもぬけ出てはる山のわらひくひつゝ玉きはる命のかきりしまつ
　とりうゑをしのきし人もありあるは切にし名を遂て身をいたりそき
　猿の尻あかき心をなゆ竹の世にあらはして秋山のみのなるはてはさ
　につら我真似しつゝ入月の山かくりせりさるわけをしらさるからに
　落猿は人まねすとてふもとなる里の餅屋の飼さるともち上くれて店
　先に売出し銭のつなき上けみすちたらぬとおのか毛のけもないこと
　にうたかたのうたかひうけて玉くしろ手か長いとて餅店のぬれ衣を
　着てもとかしはもとのまほらに追鳥のおひかへされて親さるのあか
　らひ顔にひちりこの涙めりけらし流れ矢のそれをおもへは猿智恵を
　たのみしことか浅猿と尻わらひして今にやまさる
67 関泉園の店の額にかける大津画の伝
　めさや〳〵大津に名たゝる浮世絵の其いにしへはさま〳〵の御仏を
　ものして旅つとにせしを中昔より吃の又平とかいへるもの仏絵のい
　とまにあやしき此画をかきはしめし其くさ〳〵には鬼の念仏したる
　座頭の酔しれし神鳴の太鼓落したる女の藤の花持たる瓢にて鯰おさ
　へたる前髪の鷹匠弁慶釣かねをかけたる此外品あり乱あされたる画
　なれと是を張し家の内には夜盗いらす又幼子はおそはれすしてよく
　眠るとて召るゝありはた風流を好む人は此画のふりよ何某の家の画
　法にもあらす定る所の筆法にもよらておのれなりのあやしきかかた
　まりて名物となれるかをかしとて召すそは召す人々の御心にしまか
　せなむめせや〳〵
　戸さしなき世に逢坂のおほつ絵をめす人斗せきとゝめてん
68 雪達磨といふ端歌の唱歌
　みちのくのいはてしのふをなさけともおろかなる身はえそしらぬつ
　ほの石ふみかき尽すふみもゆるさて心からこゝろにつたふせきのい
　のををしへの外の法の道うそかまことかしら壁をにらみすまして夜
　もすから座禅にあかすひとり寝はかねにうらみもあらはこそ鳥の八
　声も夢となりさとりの窓の夜は明てのとけき春の朝日うけこゝろと
　けては本末の一物もなき雪たるま
69 をりにふれてよめるかた歌
　やよふむな梅をる下にふきのとう
70　きさらきやまた松くさきあらし山
71　おほろ夜にこゝろの似たる生海鼠(ママ)哉
72　木はさみの水切る音や牡若
73　うこきさへすれは涼しき蚊帳かな

近世後期から幕末の歌壇の傾向でもあるが、短歌のみならず、長歌がみえることと、片歌（佐佐木弘綱なども、時折ものしている）や端歌をもみえるのはおもしろい。歌題にも、俗事と雅事が交り、狂歌では無く、自らの歌詠を和歌としたのであるから、雅事の題詠の姿あるべきものを俗事のこととして詠んでいる32の和歌など、幼稚の感は拭えぬかもしれないが、やはり近代性への萌芽をまったく持っていないとはいえないであろうし、36のように従来なかった題詠の「埋火」に対する五感でもとらえ方も、颯々独自の歌風の最もよくあらわされたものといえよう。

32霞　破かやの小穴つくらふこてのうへにあられたはしる軒のしの原

36埋火　小夜中にかきおこされて埋火に残さす炭もつふやきにけり

無論、32は源実朝の『金槐和歌集』に載るところの名歌を本歌取りにしたものであって、古雅はイメージが当世に換骨奪胎されているわけである。

また、近江の人だけあって、撰ばれた和歌や雅文に、54・67のような大津画がものされたものもあるのも、地方歌壇の人らしい。颯々という語は、風の吹く音の漢語的表現であるが、これは秋廼屋と雅号と共に用いられるものらしく、短冊の署名をみると、「颯々」と「巨規」と両様があるが、その使いわけについては差異はあまりみられないようである。これらをみても、古今集を尊ぶ桂園派風の歌風もみえ、例えば「けり」「なりけり」の桂園調が多く（1・8・21・28・36・47・50・65）、次に「らん」ととめるものが多く、調ぶることに重きを置いているようであるが、その号には狂歌人的な匂いが強く、第三者からは、颯々のいう「誹諧体」は理解のしにくいものであったことであろう。

（三）伊東颯々をめぐる人々

『まつかぜ集』の序文を寄せた喜村行納と跋文を寄せた服部春樹について、その略伝をも、ここであげておきたい。喜村行納など能書の聞えのあった歌人で『平安人物志』にも載るほどの人物であるのに、『和学者総覧』に載っていないのは不思議なことである。

喜村（木村とも）行納、書家として『平安人物志』（嘉永五年版・慶応三年版）に載る。姓は源、字は正教、通称を敬次郎、また半六とも、木戸千楯門下、京都新町蛸薬師南に住し、山形侯水野和泉守の京御用達を勤めた。没年不祥、明治十八年七十一歳の時に自筆自輯の『伊呂波字彙』を著しているという（小笹喜三編著『平安人物志　短冊集影』昭和四十八年四月二十日刊、思文閣）。

服部春樹、家代々が大津円満院宮家仏地院侯人で父の名は白寛、その第五子にあたる。村居真帥・香川景樹に学び、宮門跡の侍講となり、明治維新後、度々、宮内省御歌所より召されたが応ぜず、家塾や和歌社中の初学社・篠並社で門人の指導にあたったという。一時は、修道小学校の教師を勤めたという。号を倭文舎、文政七年三月十五日生、明治二十八年八月八日没、七十二歳。板本の『篠並集』の編で知られている。同集は、幕末・明治期の近江歌壇を窺うのに最適のものである。

あと、颯々ゆかりの人々は『まつかぜ集』に「山花」「水辺夏月」「秋夕」「野外時雨」「湖」の五題で和歌を寄せた人々の名を末尾に列記しておくことにする。姓が記されていないため同名の異人をあげてはならないので、尾崎穴夫、井上景明、遠藤千胤・赤松祐以など著名の人もあるが、その所載の順にあげて、歌数をもあげておくこととする。

千胤3・穴夫5・教寿1・俊一2・由信2・後渡瀬2・長雄2・雲寿2
昌雄3・資雄1・隆吉3・包智1・太沖2・嘉時1・養3・景明4
東鮒2・貫堂3・浦住1・鶴所2・宣隆2・後秀1・蓮成1・為幸1
真菅2・良正2・真盛1・安波志3・千春3・徳助2・束穂3・矩弘1
曇曄1・綱信2・洗心1・葉面2・豊久3・正起1・救室1・淑悰1
春嶺4・鈴雄1・萍庵3・真澄2・為名2・文明3・鳳嶺1・守道1
喜久女3・勤2・山広2・愚山1・一雄3・勝吉3・克亮1・可女人1
俤女1・延世2・時雄3・千風2・秋近3・義彦2・春樹5・秀子1
重定1・基一1・祐満1・美蔭1・惟重1・辞仙1・祐以1・信方1
良喜1・勝界1・以与子1・茂樹1・三猿1・直1・種夫1・漸月2
秋尚1・今滋2・芳矩1・一治1・恵照1・五道1・千座2・直方1
関人1・長明1・親尹1・多津枝1・明瑞1・義則1・直彦1・豊女2
真州3・真砂1・一秀1・梅年1・含章2・性順1・素茂1・尭顔1
恵照1・謙恭1・陶賢1・湛月1・保満3・千風1・謙吉1・義弘1

定明1・清彦1・章元1・善彦1・畠1・宗慶2・秋尚1・直輔1
欣浄1・章董1・要範1・鈴雄1・行宗1・宗恢1・良正1・一海1
有徳1・勇夫1・敏貫1・秀好1・戒定1・胤豊1・一二1・夏海1
正明1・正晴1・資成1・桂南1・清月1

右の人々は、歌人として有名・無名雑多であるし、あいさつとしてのものもあって、いかほどのゆかりの人々であったか濃淡はあろう。

勿論、伊東颯々の門人が多くを占めているであろうと思われるが、湖西の住人だけでなく、京・大阪・讃岐・因幡・周防・名古屋・美濃・大津・大和・若狭・湖南・備前とかなり様々な地名が住所としてあがっている。惜しむらくは、姓の記載が無いことで、同名異人が多いので、迂闊に、その各々は断定できないが、吉田虎之助編『鳰のうみ』(昭和三年十二月一日刊、吉田虎之助発行)や、前述の『篠並集』で照らしあわせたならば、いくらの歌人の姓名は浮かびあがってこよう。

本稿では述べ尽くせなかったが、服部春樹が近江歌壇の中心的存在として揺ぎない立場を持ち得たのは、門人護得の力量と社中運営の巧みさ、そして和歌の実作だけでなく、歌学・歌論の指導による実力、そして家柄・家格といったことがあったようである。その点に比しても、伊東颯々は、はるか及ばぬものが、それらの各点に存したようで、颯々の歌風・歌論を発展維持させる門人もなく、門人らも春樹の傘下に吸寄せられていったようであり。『まつかぜ集』は、正に伊東颯々の追悼歌集であると共に、颯々門下らの最後の力を結集したものであったようである。同時に、歌集上梓は異風ともいえる新しい歌風の発展の可能性が消滅していくなかでの、最後の雅事ともなったのである。

付・図1は『まつかぜ集』の見開きの彩色部分挿絵をいれた。歌集に挿絵がはいるのは、近世後期の絵入り俳書や絵入り狂歌本の影響であるが、歌集では明治期にならねば、その例を多く見ることは出来ない。無論、幕末期にも、少数だが、純粋たる歌集に彩色刷挿絵のはいった本は存する。が、例は少ない。図2は、上代様を得意とした喜村(木村)行納短冊と伊東颯々の短冊である。

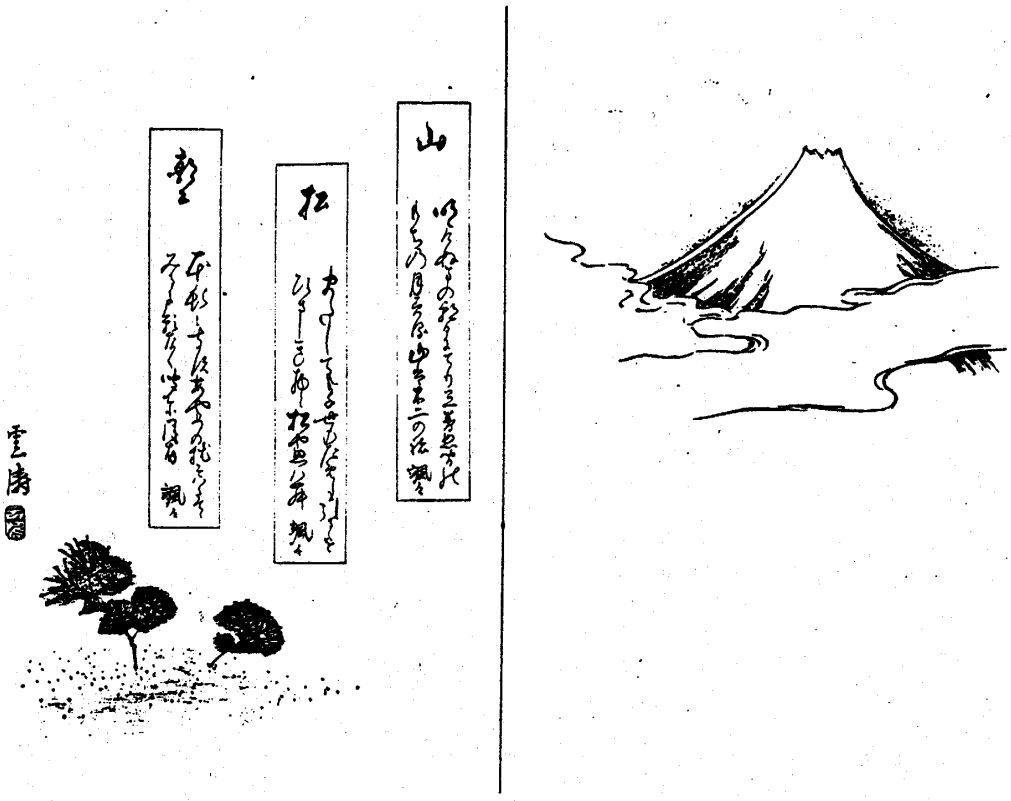
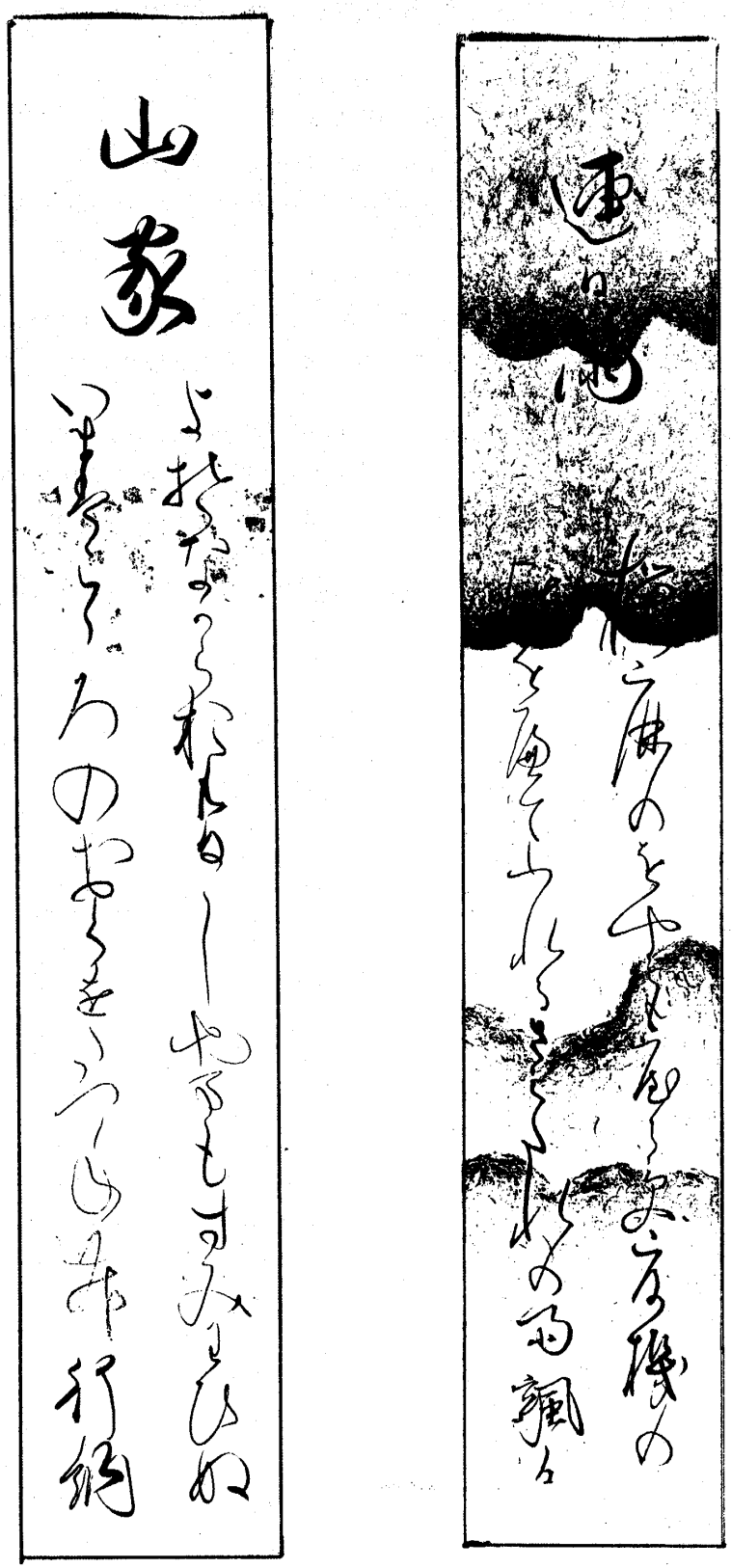


図1.『まつかぜ集』雲涛画・颯々短冊見開き挿絵



伊東颯々短冊（架蔵）

喜村行納（木村とも）短冊（架蔵）

図2

Satsusatsu Ito: A Master of *Haikai* poetry

Shuji Suga

Department of Japanese, School of Letters,
Mukogawa Women's University, Nishinomiya 663, Japan

Abstract

In the late Edo through the Meiji period various schools were established in the field of *waka*, traditional Japanese poetry. By emulating each other, they developed theories of poetry and created new styles.

This peper investigates the life and achievements of Satsusatsu Ito, who was from Omi and represented *waka* poets in the late Edo period. Although he followed Kageki Kagawa, he established a new school. He aimed at the style of *Kokinshu*, and called his poems *haikaika*. Therefore he detested his poems being identified with *Kyoka*.

An explanation follows as to why he was unique in the world of *waka* poets during his time.